

匍ふもの

——篤夫は照子夫人からの頼みを果さねばならなかつた。

翌日、彼は雑誌社を早退けにして、正午すぎから大森へ出かけた。

昨夜はあんなに牙え返つてゐたのに今朝がたから急に時雨で来た空は、彼が電車へ乗つたところからたうとう氷雨めかしい冷たい白い雨を落して来た。木村家に着いた時分には、外套の肩に當たる雨は雲をまぜてポト／＼と重たい氣がするのだつた。

照子はまだ風邪の床にゐた。彼女は彼の顔を見ると、今まで枕に當ててゐたに違ひない、眞紅に充血した片頬をほゝゑませて、やがて小さなあくびをした。

「まあ、變だわね、あなたの顔を見てやつと退屈から逃れることが出来たと思つたら、却てあくびが出たわ——ごめんなさい。」

篤夫は未亡人に最近自分の境涯が變るだらうといふことを告げ知らせた。星子のことを省いて、大

政治家の秘書に榮轉するかも知れぬと話した。彼は謙遜だつた。そして木村から紹介された古川氏にそれが義理を欠くことになりはせぬかと、濟まなく思つてゐるとつけ足した。

「結構だわ。男が自分を大きくするのに何の遠慮もありはしないわ。あたし達だつて、あなたが小さな雑誌社などにいつまでもゐる人でないといふことはとうに感づいてゐたわ——でも、あなたを見出した長田さんはえらいわねえ。」

と、彼女は樂げにいつた。

「あたし、昔競馬に凝つたことがあるのよ——あたしは馬に凝らずに、騎手に凝つたの。あたしはどんな馬でもぐん／＼乗りこなす技倆を持つ人が大好きだわ。」

——熱い茶を飲んでしまふと、篤夫は厄介な仕事を片づけてしまはうといひ出した。不思議な熱病は、まだあの無口な書生に取りついたまゝでゐるかどうかをたづねた。

「ほ、ほ、ほ。」

と、未亡人は肩をすくめて笑つた。

「あの、益々をかしいのよ。このごろもう神田の學校へも行かないの。そして、毎日木村のお墓へ参詣してゐるわ——あたしの病氣が心配だから、早くなほしてくるやうにおがんでゐるんですつて——」

「殊勝ではありませんか。」

「まあ、いやな——でも、あたし、もうこはがつてはゐないわ。あなたが始末をつけてくれると考へてゐるから——」

そして彼女は、今日こそ追放の宣告を下してくれるやうにと頼んだ。

篤夫はいつた。

「こゝへ呼びませうね。あなたがいらつしやるところの方がいい。」

「その方がよければさうなさい。氣味がわるいけど——」

篤夫は柱のベルを押した。夫人は小女に書生を呼ぶやうに命じた。

間もなく、銘仙緋に同じ羽織を着て黒い兵児帯を胸のあたりにしめた、髪をやたらに伸ばして、青

光る角顔にニツケル眼鏡をかけた四角な體つきの青年は、闕の外で咳をしてはいつて來た。そして部

屋の隅にかしこまつて、お辭儀をして、下目使ひの白い目で夫人と篤夫を眺めた。

「あのね。」

と、照子は床の上にキチンと居すまゐを正して、やんはりといひかけた。

「とうから細田さんに、あなたへお話ししてくださいと願つてあることがあつたよ。細田さんから聞いて頂戴。」

「はあ。」

青年は両手を膝に置いて、伏目で篤夫を見た——まるで額ごしに狙ひをつけてもするやうな目で——篤夫は何がなしにひどく可笑しくなつて、笑ひ出しさうになつたが、それを噛み殺した。

「僕たちの言葉を、悪く取つてくれては困るのですよ。實はネ——」

書生は両手を膝の上で組合せた。

「はあ。」

「實はネ、おくさんも御心配なすつてゐるのです。君も文學を修業するつもりで木村先生のところへ折角たよつておいでになつたのに、先生がおなくなりになつて見れば、いはばいつまでこゝにゐても仕方がないわけになる——ね、さうでせう？」

「はあ。」

モヅリと返事をする。身うごきもしない。

「それなのに、いつまで君を引とめて置くのはお氣の毒だ——だから、もう十分御好意はわかつてゐるから、この邊で君に別の方針をえらんで貰ひたい。と、まあ、これがおくさんの意志なのです。どうです、君の考へは？」

「はあ。」

篤夫は夫人と目を見合せて、目だけで嗤ひ合つた。

「君にも考へもあるでせう？　しかしおくさんとしては、君を引とめて置くことはどうしても心苦しいといはれるのです。それで、君が二月か三月自活するだけのものは差し上げるから、どうか明日にも退去していただきたいとかうおつしやるのです。異存はないですか？」

青年は額ににじみ出した油汗を拭かうとしてか、涙が出て來たのか、着物の袖で横なぐりに顔を拭つた。

「どうでせう！　肯いて貰へるかしら。」

「はあ。」

「ぢや、いゝんですか？」

と、篤夫は張合ひ抜けがしたやうにいつた。

「はあ。」

ぢつと、坐つて、膝をみつめたまゝである。

夫人はあるいら立たしさを感ぜたらしかつた。

「ぢや、もういゝわ。明日歸ることにして、部屋で支度でもなさいな。」

「はあ。」

青年ははじめて見上げた。黒目の小さい、魚の目のやうな兩眼は、近眼鏡の奥で充血してゐた。

「ぢや、あつちへいらつしやい。」

と、篤夫がいつた。

青年はお辭儀をして、もう二人をば見ずに後向きになつて匍ひ出した。匍つたまゝ闕の外へ出て障子をしめた。そして冷たい廊下へベタリと坐つてしまつたらしく、物音もしなかつた。

夫人は眉をしかめて、目だけで笑ひながらいかつげに聲をかけた。

「どうなすつて？　あちらへいらつしやいな——」

「はあ。」

ゴソ／＼と立ち上つて、やつと足音がむかうへ消えた。

二人は聲を立てずに、しかしあからさまに笑ひ合つた。夫人は、とはいへまた肩をすくめた。

「ね、氣味がわるいでせう？　よつぽどどうかしてゐるわ。」

「戀してゐるだけですよ——かあいさうに——」

と、篤夫はことさらに嘆息して見せた。

「戀する男は、いつもあんな目にあふのです。」

「だつて——」

と、夫人は肩を曲げて蔑んだ。

「だって、あの人はけだものですよ。ごらんなさいな匍つて出たぢやないの。」

「あんまりだし抜けだつたのでびつくりして腰が抜けたのでせう。」

「まさか——」

——ふと、また足音が歸つて來た。足音の主は、障子はあけずに外に坐つて、囁くやうにいひかけるのだつた。

「どうしても置いて頂けませんでせうか？」

篤夫は立つて障子を開けた。青年はこちらに背を向けて、雲に灰黒く濕れる庭を見るやうにしてゐる——

「しかし、おくさんの意志がさうきまつて見れば仕方がないでせう。」

「はあ。」

青年は腰を屈めるやうにしたまゝ立ち上つた。そして去つた。

まだその人の耳に届かうといふのに夫人はヒステリカルに笑ひ出した。

「ほ、ほ、ほ、ほ、ほ。」

——鞭打つやうな笑ひであつた。

「おくさん、あなたは残忍な方ですね。」

と、篤夫はいつた。

「きたなくつて、藝も能もなくつて、どんな瘦犬よりも始末に困るわ。蹴飛ばさずにもられやしないわ。ねえ。」

篤夫は立ち上つた。そしてソツと書生部屋の見える方へ行つて窓越しにのぞくと、角顔の青年は、また四ん匍ひの格好をして、押入に半身を突き入れて、今や行李を引ずり出さうとするところであつた。

樂しき泥沼

——いつか年の瀬が押し詰らうとするころ、篤夫の生活は、いよ／＼匆忙なものになつてゐた。思ひ設けた通りななりゆきで、表面何等のこだわりもなく古川氏の手元を離れた彼は、今や大政治家長田氏の、お側去らずの秘書として、寸暇のない、しかしかなり緊張した一日一日を送るやうになつたのだつた。長田氏は新しい政治季節に當たつて、新政黨の組織に取りかゝりはじめてゐたので、殆ど席のあたゝまるひまもなく、甲の會合から乙の會見へと、大車輪の働きを見せてゐたので篤夫の健康を持つてさへ、この頃ずつと宿つてゐる大森の照子夫人の家へ、終電車で歸るころにはへト／＼になつてしまつた。だが、すべての現前する世界は生々として愉快だつた。彼は多くの政治家を見た。官僚派を眺め、民主家に接近した。そしてさうした人々が、多少なりとも、木村が彼に嘗て鼓吹した機會主義者であることを發見するのは痛快だつた。すべての人々は高く遠い理想主義の假面にかくれて、その實驚くべき利那派だつた。目の前に出て來るあらゆる機會を掴んで、自らを利さうとしてゐ

ないものはないやうに思はれた。

——これが、あらゆる成功家の秘訣なのだ。あらゆる人達は自分だけを大きくし、満ち足らはせることに奔命してゐる。そして、それでいいのだ。なぜなら、どんな聖人にしろ自己を高い峰の上に押しおせばねば、道を他人に示すことも出來ないし、自己を高い峰に押し上げるには、當然、低い意氣地なしどもの頭を踏んで行かねばならぬのだ。現代においてほんの銷閑的の意義をしか持たぬ一小説家にすぎなかつた木村氏は、しかし、あの晩だけは僕に眞理をいつてくれた。攀ち上ることだ。掴み取ることだ——その外何もない。

さう篤夫はいつも自分にいつて、いふべからざる得意を感じた。

さういふ場合にも、彼は快樂から隔離されてしまひはしなかつた。彼のいはゞ勤め先きには、彼を父の使用人としては眺めずに、自分の親友として待つ星子がゐた。彼女は篤夫が、ふち子のあれだけの愛情を捨て自分の方へ來たことを、ごく娘らしい氣持で解釋して、ほとんど感謝の念をさへ抱いたのである。もし彼女に篤夫の去就が、彼女への愛からではなく、長田氏の世間的勢力が古川氏に百倍してゐたためだと説明するものがあつても、到底本氣にはしないであらうと思はれた。

「つまらないわねえ。毎日あなたの顔を見ながら、しみじみお話も出來ないなんて——でも、そのうちに、きつともうすこし暇が出來るわ。さうしたらお父さまばかりにあなたを借さないことよ。なぜ

つて、あなたをこゝへつれて来たのは、私ですもの——それに、そのためには、私にはかけがへのな
いふち子さんとさへ疎遠になつてしまつたのですもの——」

などと、時々彼女は歎きもし、望みも抱くやうにいふのだつた。そして、せめて新年早々は父親の
休養を兼ねて熱海の別荘へ、二晩だけでも一緒に行くことにしようかと約束した。

篤夫は星子の場合に功をいそがなかつた。長田家には多くの人達の目があつた。長田氏の周囲は古
川氏のそののやうに單純な、お手軽なものではなかつた。彼はこの娘となら、たとへ自分の一生の貞
操的自由を賭して、結婚といふ陰氣くさい行爲を決行しても、決して損の行くはなしではないと考へ
たものゝ、この娘ととりいそいでそこまで接近することは、あるひは却てこの娘から彼を引離すこと
になるのを恐れた。ある情況においては、最も甘美な果實は、最も最後に賞翫すべきものであるこ
とは知つてゐた。

それに、ふち子こそ、いつまた二度とあふことになるか判らないひとになつてしまつてゐたが、彼
の當座の生活を色どるためには、照子夫人やはつ子が残つてゐた。とりわけ、美しい新寡婦との交渉
は、きはめて自然な發展を見せてゐた。

こゝに、一人の、あまりに豊すぎる肉體と胸とを抱いて、彼女の打明けばなしによれば、亡夫の生
前すでに二年近くも夫婦らしい生活を送り得なかつた女性があつたとしたならば、そしてそのひとに
今は何等の境涯の束縛もなくなつて見れば、篤夫のやうにどんな異性にも微笑を見せることを忘れ
ない青年に對して、ある空想を抱きはじめ、やがてその空想を極くソツと祕密な部屋の中だけででも
實行して見ようと焦るのに不思議はなかつた。

——ある外面の闇をみだして風が荒れさはぐ深更、照子は自分の居間のこたつで、友禪の布團にぐ
つたりと片頬を凭らせるやうにして、疲れ切つて、しかしその疲れのために一そう情熱的なかげを漂
はせた瞳で篤夫をみつめながら、乾いた、眞つ赤な唇で囁くのだつた。

「あたし、いつまでも誓つて頂戴とはいはないことよ。あなたを側に引とめて離さないやうなことは
あたし、決してしませんことよ。だから、あなたは好きな間だけあたしを思ひ出して頂戴——たとへ
あなたと離れれば死んでしまふだらうと思ふやうになつても、決して口に出してそんなことはいはな
いわ。だつて、あたしはあなたのやうな若い方に誓ひを求められるほど、清らかな、汚れない女ぢ
やないのですもの——いろんな男に即いたり離れたりして来て、それでもかうして平氣で生きてゐる
女ですもの——」

彼女は恥も呪ひも含めずにいつた。

親みが濃くなるに連れて、恰度賣春婦が馴染の客にはどのやうな過去をでも打明けて、その追憶によ
つて現在の戀を味はひづけ、相手の好奇心を刺戟しようと巧むやうに、照子は木村に嫁ぐ前の、金で

身を委せた時分の生活についてくはしいエピソードを語るのだつた。

「だつて、年寄りのお婆さんになるほどの女で、自墮落なことをせず辛抱出来るはずがありませんもの——短い間なら兎に角、それが一年も二年もつゞいて、この上もつゞいて行くものと考えなければならなかつたら——あたしだつて、はじめはそんなことはしなかつたわ。自分も早くお婆さんになつて、美くしい夢や激しい望みを抱く力がなくなればいいと思つたこともあるわ。でもなかく年を取らなかつたものだから——」

——彼女は、篤夫なども名だけは聞いてゐる俳優や音楽家や、ことによると、もつと堅氣な職業の人達とも、秘密な思ひ出を持つてゐた。彼女は、たゞこれだけは誓言した——木村氏と一緒になつてからは、一度も間違つた夢は見なかつた。あの綺麗な容貌を持つた醫者とさへ、手を握り合せたこともないのだつた。

しかし、篤夫の方では、照子が彼女自身をわざ／＼引下げて、卑しくして打明けばなしなぞをすればするだけ、奇怪な煩惱が増すのだつた。さうした過去を持つた彼女が、男性としての活力を、ほんの文筆上の仕事に残してゐるだけで、ほかの方面にはまるで喪失してしまつたやうな木村氏のために、貞節な妻としての操を守りとほしてゐたらうとは信じ切れぬのであつた。そして、さうした疑惑が一度影を翳すと意地悪い執拗さで心に黒々とまつはつて來た。毒々しいまでな、穢らはしい幻影が

あとから／＼現れて來た。

彼はあのみにくい、匍ひまはるけものやうな書生が、荷物を人力に積んで追放された家を出ようとする時、玄關で、彼の顔を見上げて歎息した時の短い言葉を思ひ出した。あのみにくい青年は、黒ずんだ厚いくちびるで呟いたのだつた——

「——仕方がないのです。僕はおくさんのいふまゝになしければならない男なのですから——それをとうからお約束してゐるのでから——」

その時は氣違ひじみた莫迦者の莫迦げた言葉としてのみ聞いたのであつたが、今、醜穢な疑惑の中に投げ込まれた身で思ひ合せて見ると、その言葉にすら淺猿しい想像を誘はれた。そして照子の夫哲三が、ある時いつたのを思ひ出すのだつた。

——女といふ奴あ、地蟲なんだ。——
そして篤夫は肩を聳やかした。

——だが、今つから地蟲の餌食なんぞに逢つてたまるものか！ 僕はひどく疲れたために、こんな女にとんだ足元を見られさうになつた。この女だつてほかの女だつて變りはない。

それでも、照子が嫉妬されてよろこぶたちの女だと知つたので、深夜二人で顔を見合せば、彼は醫者や、書生のことすらもいひ出して彼女と争つた。

「僕がこゝへ来て、こんなことになつたのはあやまりでした——木村先生の罰です。だからこんなに悩むのでせう——僕は明日にも退かなければ——」

いつも、そんな風に篤夫はすねた。

すると照子は、反けようとつとめる彼の目を、細目に細めた瞼の間から射出すまどはしの視線で追つて、ねんばりとからみついて來るのであつた。

「逃げる氣なの？ お逃げなさいね。逃げられたら。」

しかし、篤夫は、だん／＼彼女との交渉を遊戯化することに成功した。それで安心した。彼に取つてはことさら戀愛は束縛ではなかつた。

——すべて束縛は不快なもので、自由だけが尙むべきだ。この女とどんなに深入りをしてもいいから、いつでもその泥沼から浮かみ上りたい時に浮かみ上がれるやうに修業して置けばよい。この女に溺れて、同時にこの女をさげすむことに成功すれば、僕の女修業も大分進歩したといふものだ。

彼は照子の持つ奇怪な魅力との競争に熟練することを欲した。そしてさうした夜のあとで、彼は匆忙な新世界で政治的な渦巻を眺めた。この部面では彼はまだ端役ともいはれなかつた。けれども、立役者が扮する人物のうしろにこびりついてゐるお小姓役者は、はた目からは邪魔にならぬ程度で目につくものと見えた。

——新興社の人々は、彼が長田氏からの招きで急に去つたのを見て瞠目してゐた。だが、篤夫は誇りがないうろを浮かべて見せるほど正直ものでもなかつた。

「いゝえ、ほんのカバン持ちですよ。それにすぎないですよ。」
と、彼は笑つて見せた。

類れた花

——だが、さすがの篤夫も、ある夕方長田氏の命令で、古川家へ主人にあつて打合せをするために出かけた時には、思ひもかけず難局に立つたのだつた。

古川氏の手元を離れてからも、もちろん、彼は何度も舊主にはあつた。殆ど二日にあげず、長田氏の用事で新興社を訪問した。だが、彼はその本邸に足ふみをする事だけは出来るかぎり避けてゐた。しかし、その日に限つて、軽い流感でふせつてゐる古川氏に、新しい主人の手書を手交して、返事を聞いて来いと命ぜられたので、それをどうすることも出来なかつた。

黒いポーターフォリオをかゝへて、彼が玄關に立つと、馴染の小間使はうれしげに笑がほを作つた。

「まあ！ 随分お珍しい——恰度ようございますわ。お嬢さまも御在宅ですの。さあどうぞ——」

「いゝえ。」

と、篤夫は苦笑した。

「今日はあの方への用事ではないのです。先生に申上げて下さい。御病室でちよいとお目にかかりたす——」

「まあ！」

と、小間使はいよく目を見張つた。

「さうでございますの——ええ、ええ、申上げますけど——では、その御用が済んだら、あとでお嬢さまに——」

「ひどく急ぐのです。」

と、篤夫はいかつく、

「すぐ歸らなくてはならないから、それで御無用に願ひます。」

——彼は日本間の病室に通された。舊主人は、厚い、あたゝかさうな夜具に包まれて、うつたうしさうに咽喉に濕布して横たはつてゐた。枕元には、もしやそこに坐つてゐはせぬかと怖れたふぢ子はゐなかつた。瘦せがれた母夫人が、體溫計を調べてゐるところだつた。

夫人は、古川氏と同じく、ふぢ子とのいきさつは何も知らぬと見えて、こゝろよく迎へてくれた。彼女はしかつめらしく手をついて見舞をのべる篤夫をなただけ自由にさせようとして、

「まあ、そんな固苦しいこにはいゝかげんになさいよ。でも、長田さんの方もさぞおいそがしいでせ

うねえ。」

「有難うございます。まだ何のお役にも立ちませんが——しかし、僕としましてはお社の方へどうしても踏み止まつてゐたかつたのですけれど——」

と、彼は感情的にいつた。

「いや、君はあつちへ行つた方がいゝのだ。僕のためにも——」

と社長は天井を向いたまま、咳にかすれた聲でつぶやくやうにいつた。

「君があそこにゐるのは僕のためにもよろしい——いろ／＼君に頼まなくてはならんことも當然出来るだらう。」

古川氏ほどの人物でも、篤夫をば自分が取り立てた若ものだといふ事實から、ある偏見に陥らずにはゐなかつた。子飼だといふことのために、どんな店員をも信用しようとする商店主の錯誤に、彼もまた、はまり込んでゐるのであつた。

「ええ、もちろん。先生のおためには、どんなお役にも立ちたいと考へてをります。」

篤夫はつゝましく答へた。

で、彼は長田氏の親書を渡した。主人は腹削つたまゝ讀んで、

「はゝあ、來週土曜の永樂會館の演說會へ出席を求めてゐるのだね。さあ、この風邪がなほればい

いかなあ——何しろ、三十八度六分の熱が、もう三日もしつこく離れないのだ。」

「しかし、先生が演壇にお立ちにならなければ、随分寂しいことになりませう。」

「でも、咽喉をすつかりやられてゐるからなあ——まあよし、まだ一週間はあることだ。出来るだけ養生をして、なほすことにしませうと申し上げてくれ給へ。」

篤夫は相手が談話に耽つてはいけぬ病狀なのを口實に、すぐにいとまを告げようとした。すると、

夫人は、ふと思ひ出した風で良人にいひかけるのであつた。

「ねえ、あなた、あのことを篤夫さんからもあの子にすゝめて貰ひませうかねえ——あの子は何から何まで篤夫さん次第なのだから——」

「ウム。」

と、主人はうなづいた。

「それもいゝだらう——若い人から話して貰つたら、却て理解が行くかも知れない——」

母夫人は、そこで篤夫に説明した。最近ふぢ子に、この上ない良縁と思はれる縁談がはじまつてゐるのだつた。先方はフランスから二三年前歸朝したばかりの若紳士で、父親に男爵議員を持つてゐた。父親同志は政治的に反對の立ち場にあるが、そんなことは問題ではあるまい。後取むすこは、よき新妻を迎へ次第、彼女をたづさへてふたゝびフランスに渡つてカミュ教授の下で専攻の社會學の研究を

完成して来たいといふわけだつた。

「それで、この縁談はだれでも心から賛成してゐるわけですよ。岡田家といへばまあ門閥も財産もそんなことをいつては何だけど——うちなんぞとは比べものにはなりませんし——當の相手もまあ秀才といつてもいゝし——折角先方が進んで来てゐるのですから、この縁だけは取にがしたくないと思つてネ——それなのに、あの子はどうしても肯かうとしないのです。何と思つたか、あたしは一生獨身でゐたいなんて！　ホ、ホ、ホ。お轉婆さん、何を考へてゐるのですかねえ。でも、ほんたうに手古摺つてしまつてゐるのよ——約束だけでも、年内にしてしまひたいと先方ではいふものですから——」

——何といふ滑稽なはなしだらう！　ふぢ子とあれほどまでの關係に立つてゐた僕に向つて、彼女に新しい縁談を説きすゝめると求めるとは！

彼は苦笑した。事實、彼が皮肉に春彌に告げた、彼自身と古川家との位置に關する解釋は、まだ舊世紀の醉夢から醒きらぬこの親達を相手としては當たつてゐるといふべきであつた。娘だけは——若い魂と肉體とだけが、いつもその埒を跳ね越えようともがくのだ。親達は、大恩ある自分どもの娘を、どうしてこの身分低い青年が欲望し得ようなどと思ひも設けはしなかつた。

——どうしてあなた方の目はそこまで節穴同然なのだ。だから、一ばん大事なものは、ふところの

中でぬくめられすぎて腐敗する。

篤夫は心の中に嘲笑した。しかし、いかに彼としても、そんな問題でふぢ子と逢ふといふことは出来ない氣がした。彼は言葉をつくして辭退したが、夫人は許さなかつた。

「あなたは何も面倒な説法をなさらずともいゝのよ——恰度まだお夕飯前でせう。ですからあの子と私と一緒に御飯を上つて下さい。私はあなたの前でいひ出しますわ。あなたが、私のいふことにみんな賛成して下さいよ。それだけならいゝでせう？」

——どこまでも押し切るわけには行かなかつた。彼はたうとう晚餐の席に招ばれることをうけがはねばならなくなつた。

——間もなく、彼は食事の部屋によばれた。彼と夫人とが、いつまで待つてゐても、なか／＼ふぢ子は出て来なかつた。

「どうしたの？　折角篤夫さんが来てゐらつしやるのに——」

と、夫人はいぶかしげに呟いた。

「お頭がいたいとおつしやいました——」

と、小間使は困つたやうに答へた。

「どうして、あの子はこのごろあんなに變つてしまつたらうねえ——ねえ、篤夫さん、處女にもヒス

テリーといふものはあるものねえ——」

と、夫人は苦笑して、

「では、仕方がないわ。御飯だけすまして、あとで二人であの子の部屋へ行つて見てやりませう。」

篤夫は、實は先程から、夫人の前で彼女と顔を合せることを怖れてゐた。それ程たしなみのないふち子でないとしても、時の表裏でヒステリカルな言葉が出ないとも限らない——寧ろ、それよりも一人で逢つた方が安全ではないか——

彼は一度ついた食卓を離れた。

「僕がおよびしてまゐりませう。」

「え、さう願へれば——あなたの言葉なら、きつと、きまますわ。」

と、夫人は微笑した。

篤夫はもういつもの冷たい微笑を返すことが出来た。そして階段を二階へ上つて行つた。

ふち子の部屋のドアの外へ、ちよいと立ちとまつて、耳をすまして、軽くトン／＼と叩いたが返事はなかつた。彼は無遠慮に、扉を細目にあけてのぞき込んだ。

「はいつていいの？ 僕ですよ。」

と、彼は昔とすこしもかはらぬ快活な調子でいひかけた。

そして、ぐつと開いて、中をのぞき込んだが、人影はない。

篤夫は苦笑してはいつて行つて、鈍乳色のカーテンを下した次ぎの小間の方へかまはずにはいつた。

ふち子は、一ばん奥の壁際の緑いろのソファに、背と腰とを見せるやうにして、身を圓くしてうつぶせになつてゐた。腰から、垂れた兩脚へかけて、かすかな戦慄さへ見えてゐる。

篤夫は入口に立止つたまま、ちつとみつめた。

「ふち子さん。」

答へない。

「ふち子さん。」

——篤夫は苦い笑ひをうかべて、ちよいと眉根を寄せて、その方へあゆみ近づいた。

彼は見下した。はじめて彼女を見た頃にくらべて、何といふ變り方であらう。白い頸筋にも、圓い肩にも、背から腰への曲線の流れにも、めつきり力が添はつた。力とひと口にいつて悪ければ、媚びや、欲望が——

——彼は心に思ふのだつた。この娘は自分の目の前にあらはれた時、あまりに子供らしかつたために、強い激しい關係まで進むことが出来なかつたのだ。今のこの娘であれば、どうなつてゐるかかわからない。従つて急に彼女をはなれて星子の方へ急ぐわけにも行かなかつたであらう——すべて、好都

合だつたのだ。だから、今かうして、すっかり女らしくなつて、よそから縁談を持ち込まれてふくれたりすねたりする彼女が、多少惜いものゝやうな氣がするにしても、もうこだはつてはいけないのだ。篤夫はふち子のそばにたゝすんで、やさしく肩に觸れた。

「ふち子さん、お母さまがお待ちですよ。いらつしやい。」

——突然、頰れた花のやうにうつぶせになつてゐたふち子は、身をねぢ起こした。そして血濁つた眞赤な目で睨んだ。

「よくまあ、私の部屋へはいつて來たことねえ。」

篤夫は笑つて見せた。

「しかし——」

「いゝえ、私はもうあなたに、この部屋へはいつて來て貰ひたくはないわ。あなたは私のお友達の前で、私に絶交を宣告してあるぢやあないの——」

ふち子はドス赤く充血した唇で嘲笑した。

「きつと、あなたはお母さまかだれかから、何かたのまれていらつしやるのね。それで用もない私の部屋へ來たのだわ。いゝわ。私には私の考へがあるのだから——ねえ、篤夫さん、これだけは覺えてゐて頂戴。私、あなたがかうしろといへば、いやといふわ。かうするなといへば、いゝえ、してよと

いふわ。だから、あなたは餘計なことに口出しをしてももう無駄なのよ——食堂へはすぐに伺ふから、早く出て行つて下さう。」

——可愛らしい復讐ではないか——伶俐な娘だが、彼女はその勝氣な氣性から何度か惱むだらう——いそがしい男は、面倒くさい戀路なぞにいつまでも關係してゐるわけには行かないのだ——現代において、女性は進化したかも知れぬ。しかし愛慾の世界においては彼女等は力を失ひつゝあるやうに思はれる。愛するものは我を張らねばならぬが、愛さるべきものは素直で、やさしい方がいゝ——現代のクレオパトラは、女の方から男を追ひかけまはして悶える外はなくなるであらう——ふち子さん、僕は君がそんな女にならない方がいゝと思ふね。

——篤夫は階段を下りながら、こんなことを心に呟やいて、苦々しく微笑してゐた。彼は食堂へ歸つて夫人に告げた。

「すぐにいらつしやるさうです。」

「だから、みんなあなたに限るのよ。有難う。」

と、持病にやつれた夫人は上まぶたの凹んだ目を上げて迎へた。

一年の瀬はいよく押詰るばかりだつた。議會はまさに召集せられようとして、長田氏の仕事は白熱化して來た。彼の主張はいはゞ灰いろのもので民主主義を露骨にはなかつたが、かなり進歩的な觀念を暗示し舊來の政派に多分の連絡を見せて、同時に革新の氣分を横溢せしめてゐた。それゆゑいはゞそれは時好に投じてゐた。解散を見越して、新しい戦備に努力せねばならぬ代議士連は、さうした主張が穩健でその上俗向な新味を帶てゐる上長田氏の背後に神戸地方の大富豪がついてゐるといふことのために、相當の色目を使はずにはゐられなかつた。年初早々この議會が解散になれば、新しい議席に何程かの勢力を示し得ることはもう目に見えてゐた。長田氏はその新勢力をさげることによれば右傾の民主派と大同團結を試み、政界に大きな波瀾を起こさうとする鬱勃たる野心を遠慮がちなながらも見せることを禁じ得なかつた。

篤夫もいそがしかつた。彼は別に何の機密にも、もちろん、あづかり得る分際ではなかつたが、主人の東奔西走に連れて、靴をかゝへて歩き、うしろから外套を着せかけて歩いた。どんな秘密の席にも彼だけは許された。そのたびに彼は冷たく笑つた——

——長田氏はじめ、この連中はひとをホテルかクラブの給仕あつかひにしてゐるのだ。まるで聾か、それとも犬か猫か、人間並の理解力を持たないやつの前でのやうに、ひとを側に置いて無遠慮にふるまつてゐる。まあ、今のうちは勝手に馬鹿にしたまへ。かうしてゐるうちに、だん／＼僕の牙が君たちの心の臟へ食ひ込むのだ。秘密を僕はうんと蓄めて置かうよ——君たちの秘密を。そして忘れたところにどんな役にそいつをひとつびとつ立ててゆくか、まあ氣長に見てゐるがい——

見た目は篤夫ほど忠實なものではなかつた。彼はまだ無垢な無傷な青年と見られてゐたので、四方八方に信用があつた。

彼は大阪地方の演説旅行のお供をした。遊説は四日で済んで、歸つて來ると、二通のはつ子からの手紙を自分の部屋の机の上に見出した。彼は照子がこの手紙について、少しも疑惑を抱いてゐるやうな態度を見せないのが寧ろ不思議だつた。しかし、よく考へて見ると、この表面痴らかな欲望のまゝに動いてゐるやうな未亡人は、快樂の對象に彼をえらみはしても、嫉妬を表てにあらはしたり、精神的に深入りをしたりして、あとで煩雜な問題をひき起こすのを警戒してゐるに違ひなかつた。それは全く持つて來いの彼であつた。

彼もまるで知らざる眞似をした。恰度歸宅した日の夕方、はつ子はいつもの森ヶ崎で會見を求めて來てゐたので篤夫は照子夫人へは東京の事務所に宿直せねばならぬからといふ口實をつかつて、休む間もなく家を出た。何だかすぐ森ヶ崎を指して行くのは後めたかつたので、一度大森へ出てわざ／＼タクシーを頼んだのであつた。

はつ子は、あふたびに、不思議にもだん／＼若がへるやうに見えた。最初あの電車の中で邂逅した時なぞにくらべると、めつきり若々しく派手やかになつた。おしろいは濃くなり、襟や着物にあざやかな好みは添はつた。言葉は少し蓮葉になりすぎた位であつた。

「あたし、あなたとあるいてゐると、きつと姉さんと見られてよ。ほ、ほ、ほ。」

なぞと、いつも彼女はいふのであつたが、心の中では笑つてしまへないものがあるに相違なかつた。——戀人同志のことだもの、姉弟と見られて氣待がいゝはずがなかつた。

——ことによると、雪にでもなりはしないかと思はれる、鉛いろに重く曇つた夕方がすぎて、凍てるやうな夜が來たが、鑛泉旅館の離れの間は、明るく、そして温かだつた。荒いお召柄のどてらに對の袴纏を引掛た篤夫は寝る前の微酔のからだをぬく／＼とこたつにもたせて、掛蒲團の中でネバつこい手を、彼女のそれと握り合せたり放したりしてゐた。

「でも、どうしてあたしがあなたのところへおたづねしてはいけないといふの？ 何も木村のおくさ

んとあなたがどうといふわけでもないといふなら、遠慮をする必要はないぢやありませんか？」

——はつ子は、ほんのりと染めた目の下に、かすかな嫉みをたゞよはせていふのであつた。

篤夫は笑つた。

「だつて、いかに何の關係もないにしたつて——また、事實、ついこなひだ死んだ先輩の墓も乾かないのに、そのおくさんととやかうなるやうな僕でもないが——しかし、考へて見たまへな。あそこの家はいまのところ女人國なのだ。男はたつた僕ひとりで、女主人公は淋しい未亡人さんなのだぜ。そこへ美しくい君が訪ねて來て、にぎやかな笑ひごゑを立てるといふことはあんまり心なしのわざだものねえ。それも、よそで逢へないといふのではなしかうして二人ツきりで幾らも樂めるのだもの——そこを考へてくれなければ——」

「ふん。」

と、はつ子は可愛らしく鼻を鳴らして、

「油断もすきもならないあなたの言葉を、すつかり信じてしまふことが出來ると思ふの？ あたしこのごろなんだか信じられないのよ。こんどの旅行だつて。」

「は、は、新聞を見給へな。長田さんは今度どんなにそがしい目をお見になつたか——」

「ぢやあ、その方は嫌疑を晴らしてもいゝけど——でも、おくさんの方はどうしたつて怪しいわよ。」

あたしに、あなたとおくさんと並んだところでも見せて下さらなければ——並んでゐるところを見れば馬鹿でないかぎり、その二人がどんな仲だか仲でないか位のことばかりですものねえ。」

「はつ子さん、君、そんな根も葉もないことまで心配すると、君はすぐに年を取つてしまふよ。」

——何気なしにいつた篤夫の言葉ははつ子の感傷的な心にすぐに暗い曇りを投げかけたに違ひなかつた。彼女は苦く吐息をした。

「ほんたうに——あたしはもうこんなお婆さんですものねえ。この上しじゅうクヨクヨしてゐたら、あなたがいふ通りすぐにほんたうにお婆さんになつてしまふわ。」

そして、悲しげな目つきになつて、ちつと若い戀人をみつめた。

「——あたし、でも時々は決心してゐるのよ。どうせこんな年が違つてゐては結婚が出来からだでもなし、それにあなたは當然だんくもつとく——広い世界へあるき出す方だし、小さなことには決して苦勞をせず、せめてかうして二人ゐるときだけ樂むのが花なのだ——でも、あなたの顔を見るとすぐ愚痴になつてしまふのですもの——やつぱり、あんまり愛しすぎてゐるからだわねえ。」

篤夫は微笑したまゝ答へなかつた。そして紙卷をはさんで唇をはつ子の方へ突き出すと、彼女はタバコ盆を引寄せてマツチを擦つてやつた。

「でも、たつたひとつ約束して下さいさる。」

「何を？」

「たとへねえ——たとへ今後あなたがどんな戀人をお作りになつても、たとへ結婚なさるやうな時があつても、あたしだけはどこまでも見すてまいと——」

寂しげに、素直に、美しい女は願つた。篤夫は尊大な氣持をかくして微笑した。

「あんまり先潜りはおたがひにしつこなしにしようよ。なぜつて、そのやうなことをいひ合ふとしたら、僕の方が二倍も心配を持つてゐるのだもの——そんなに美しい君のことだものね。」

はつ子は、さうした慰めで、直にすつかり憂鬱を拂拭せられないまでも、たちまち幾分のよろこびをかくすことが出来なくなるのであつた。

「そのお口のうまさ、またあたしの心配のたねになるのよ。」

「よつぽど疑ひ深いちだね。女探偵にでもなつたらさぞいいでせう。」

「ええ。あなた専門の——女の心を盗んであるく泥棒専門の——」

「は、は、は、は。」

——とうく、雪になつたらしく、冷たい、硬い音が、かすかに雨戸の外できこえはじめた。

「おや、初雪ね。」

と、はつ子は耳をすますやうにした。

「あなたと、はじめて聴く雪の音ねえ——」

しんみりと、彼女はいつた。そして、ふと、思ひ出したやうにつけ足した。

「あの——近藤ねえ——」

チカリと、冷たい微笑の目で篤夫は眺めた。

「ふん。君の大事な美學者の——」

「まあ、そんなにおいひにならないでもいいわ。」

と、はつ子は苦笑して、

「あの人、今朝、繪葉書を故郷からよこしてよ——小さな山間の田舎町は、すっかり雪につままれてゐるつて——」

「で、君は、あの人のことを思ひ出して、今夜の初雪が淋しいといふのですか？」

「いゝえ、何て口の悪い方でせう。たゞ、お話しただわ。」

篤夫は、肩を曲げるやうにしていつた。

「あの方は、今度こそほんものの學者になるかも知れない——ほんたうに新しい體系を編出すかも知れない。君のやうな邪魔ものから離れて見れば——」

「ひどいわ。」

と、はつ子はいつたが、ちつと眺め返す目にはいひがたい陶酔があふれてゐた。

「でも、悪口をいはれたり、邪慳にされたりすればする程、どうしてこんなに好きになるんでせう——不思議だわねえ——」

——遠くの部屋で、遠出の藝者のすさびでもあるのか、投げやりな、そのくせ遺瀨なげな、小唄の爪弾がかすかにきこえてゐた。はつ子はそれに耳をかたむけて、悲哀と、寂寞と、同時に幸福感との入りまじつた吐息をした。しかし、篤夫は疲れが出てゐた。彼はひさしぶりの熟眠をおもつて、遠慮のないあくびをした。

負傷

雪あがりの、美しく、麗らかな、満地が眞つ白に輝いてゐるにもかゝはらず、まるで春のやうに温かい朝が来た。

篤夫は今日はさまざまの用事を持つてゐた。長田氏は午後三時から、神田のある會館で演説會を開催しようとしてゐた。その方の用向に、彼はかなり複雑な頭を使はねばならぬ位置にあつた。會場の設備、警戒の手段、さうした事務的な仕事、主として彼にまかせられてゐるのだつた。

警戒といへば、長田氏の一身は今やかなり危険だつた。彼は今度の京阪地方の遊説で、これまで首都方面で包んでゐた鋒鏑をあらはさざるを得なかつた。なるべく自分の立脚地を樂にするために、既成政黨に對してはあるゆとりを持たせて對抗して來たのだつたが明かに敵意を示して反噬して來た政黨に對して、この際キツパリと關係斷絶を宣告せねば、こゝに及んでは却て不利益だつた。彼は、そこで、大阪公會堂の演説で、某大政黨の主張と内情とに關して、コツピどく排撃した。これまでは政

界の祕密として、公に口にされなかつたやうな問題にまで觸れて、その政黨首領を公賊だとまで罵倒したのである。

その演説は、天下にひびき渡つた。快哉を叫んで、かくてこそ新黨樹立の意義があるといふ大喝采をうけたと同時に、反對黨を烈火の如くいきどほらしめたことも當然であつた。

神田公堂における演説會には、それゆゑ必ず何等かの波瀾の起ることは豫期されねばならなかつた。

長田氏からの依頼を受ければ、立ちどころに、千や二千の人間をうごかす團體へ、今日の警備を交渉すべき役目を、篤夫は持つた。もちろん、當局の警戒は嚴重を極めるだらう。しかし、私的な團體は團體で、また何かと便利な點も持つてゐるのである。

篤夫ははつ子と早朝に分れて、ちよいと長田氏の屋敷へ顔を出すと、すぐに自動車を驅つて、引受けてゐる用事を片ばしから片づけて行つた。さうしたことにかけては、抜目のない彼であつた。その道で長年苦勞してゐる人間どもが思ひもよらない敏捷さでテキパキときまりをつけて行くのだつた。

長田氏の大阪演説は、政治好きの人々、とりわけ若い人達の間に好感で迎へられた。それゆゑ、今日の會場は豫定された開演時間に先立つて、立錐の地もない大入りだつた。

定刻前、長田氏は多くの幕僚にまもられてやつて來た。すばらしい前景氣に、さすが感情を隠すに

馴れた政治家も、微笑を禁ずることが出来なかつた。

「だから、思ひ切つておやりなさいと前々からいつてゐたのです——どうですこの人氣は！」
と、本口といふ、今度さる政黨を脱して麾下に加はつた名高い策士は、唆るやうにいつた。彼は煽動政治家の一人だつたので、人氣さへ取れれば、天下が取れるといふ信條を捨てることの出来ない人間だつた。

「だが、今日は十分の用心が必要ですよ。世間ではいろ／＼なことをいつてゐる。」

と、篤夫の舊主人古川氏は、敏感な目つきで、不安らしく呟いた。

「きやつ等に何が出来るものかね。」

と、本口は哄笑した。

「それに、壯心社の連中が二百人ばかりはいつてゐる。あの連中が頑張つてゐれば、手出しが出来ものか。」

長田氏は葉巻に火を點けては、篤夫に注意されてすぐに消し、また忘れたやうに一吹して、苦笑しながらうがひをしてゐた。この頃の必死の活躍に、この人はすっかり咽喉をこはしてゐるのだつた。

電鈴がひびいて、本口がまづ演壇に上つた。喝采と、時々罵倒と嘲笑とが洩れた。

本口のあとをうけて、古川氏も立つた。峰岸といふ右傾民主派の大學教授も長舌を振つた。

長田氏が、ガツシリとしたからだを背廣に包んで、いかにも進歩主義派の首領らしい、壇上に立つた時には、暮やすい冬のたそがれはもう窓の外に来てゐた。彼の演説内容は阪地のそれと大差はなかつた。しかし、冷罵と毒舌とは鋭さを増してゐた。

聴衆は、これまでの辯士に對するやうに喧噪の態度をば取らなかつた。場内は水を打つたやうにシンインとしてゐた。なか／＼長い演説なので、篤夫は主治醫から貰つて置いた息つぎの水薬を二度までテーパーに運んだ。

長田氏は、拳を高く上げて、大きなジエスチユアでそれを聴衆の方へ突出した。そして彼の攻撃演説はをはつた。

雷のやうな喝采、足ぶみ口笛の音鋭く鳴りひびいた。

「素晴らしい成功です。」

「やあ、今日の演説で二千はたしかに黨員が殖えましたよ。」

本口をはじめ、樂屋に居合せたほどの人達は、譜代も外様も、新聞記者も、みんなが長田氏に握手を求めた。

長田氏は稍々疲れすぎたやうに青ざめて、ニヤリ／＼笑ひながら祝意を受けてゐた。

「さあ、これから一柳亭の晩餐會だ。」

と、誰かど叫んだ。

——篤夫もホツとしてゐた。もう今日の役目は殆ど終りを告げた。まづ無事にすんだ。と、さう思ひながら、しかし、ある漠然たる不安が心を閉じた。樂屋口の方から、表へかけて、まだ群衆は一ぱいにつてゐる。彼等は動かない。もとより、大政治家の歸途を邀して、歡呼を浴びせかけようとしてゐるのであらう——しかし、あの中にどんな兇漢がまじつてゐないとも限らないのだ。現にその筋の人達も、壯心社の連中も、反對黨の末輩がより——穩かならぬ企てをしてゐるといふ情報を得たといつてゐるのである。

——いざ、一柳亭へ、幹部そろつて乗り込もうといふことになつた。自動車は樂屋口に並んで待つてゐた。

——篤夫は例によつて首領に外套を着せかけ、かばんをかゝへて、引添ふやうにして下りて行つた。長田氏の顔が、公堂裏口のイルミネーションを浴びつゝ出現すると、群衆は帽子をふつた。萬歳を唱へた。たしかに驚くべき成功を長田氏は得たのだ。長いこと政治的劇的光景にかつゝゑた民衆は、お芝居氣を満足させられてひどく喜んでゐるに違ひなかつた。不穩の形跡はすこしもみとめられなかつた。人々はめい／＼に自動車に乗り込んだ。

長田氏と篤夫とが乗つた自動車は先頭から三番目だつた。その乗物が、公堂の裏口から表通りへ出

ようと、建物に添うて曲らうとした時だつた——その一刹那、今ま、戦勝のよろこびに充たされた場景は、忽ち一種凄壯な擾亂によつてかき亂された。

いづこからか、一人の暴漢が、長田氏の自動車を目掛けて、政治的仇敵を殺害しようとしてか、それとも單に威嚇しようとしたのか、それはわからなかつたが、プロニング拳銃を打ち込んだのであつた。自動ピストルはつづけさまに六發はなれた。彈丸は自動車の前窓から、運轉手の肩をかすめるやうにして突き入つた。

その時、長田氏は足元へ膝かけをすべり落してゐた——で、篤夫が身をかゝめてそれを拾ひ上げてやらうとしてゐた瞬間だつた。長田氏の下腹部へことによつて、命中したかも知れない彈丸のひとつが、半身をうつむけつゝあつた篤夫の肩胛骨のあたりに中つた。そして、ひどい、衝撃を與へて反れ飛んだ。

——篤夫は激しい銃聲を聞いたあとで、勁烈な打撲を肩口に加へられたやうな氣がしたが、その次ぎの刹那には完全に意識を失つてしまつた。

群衆は長田氏の自動車めがけて殺到した。つれの自動車はすべてとまつて幹部連もかけ集まつた。それはすさまじい叫喚の數分間だつた。長田氏は、自分の無事を示すために、ドアをあけて半身をのり出させた。

「わしは大丈夫ですぞ。大丈夫ですぞ、しかし、秘書の細田君が、身を以てわしを防いでくれたので弾丸に中つた。」

「細田君が！」

古川氏をはじめドヤ／＼とむらがつて、意識を失つた篤夫をかつぎ出した。

何しろ「身を以つて防いでくれた」と長田氏が公言したのである。膝かけを拾ひ上げようとした彼の意志を、恐らく主しは知らなかつたと見えたが、それが篤夫の負傷に莫大もない價値を附與するこゝとが出来た。警官たちさへこの昏倒した一青年秘書を世にも、稀な勇士を眺めるやうな目で眺めて、道を開いて公堂の控室にひとまづ收容することにした。

群衆中の醫者が二人、すぐにわれから志願して傷口をしらべる役目にあつた。

二人は合議の上に宣言した。

「大した負傷ではありません。肩胛骨の一部に小さな骨折を生じてゐますが——延髄がいく分打撃を感じて昏倒したのです。すぐに覺醒します。」

注射が施され、間もなく、篤夫はボカリと目を開けた。彼は間に合せた外套を敷いたテーブルの上に寝かされたまま、いぶかしげにあたりを見まはした。

彼の口へ、一人の醫者が赤酒を含ませた。

篤夫はそれを飲んで、そしてはじめてどんな理由で長田氏はじめいろ／＼な顔が、さも懸念さうに自分をのぞき込んでゐるかを了解した。彼は微笑して見せようとしたが、肩口に痛みを感じて顔をしかめた。

「どうぢや？ 氣がついたかね？」

と、無限の愛情を以つて長田氏は呟いた。

「安心したまへ、傷は浅いんだ。」

と、古川氏がのしかゝるやうに顔を突出していった。

本口は昂奮して叫んだ。

「細田君、君は我黨の大忠臣だよ。君が身を以つて防がなければ、大事になつたかも知れぬ。」

犯人が捕へられたことが報告され、警察醫が出張するころには、篤夫は苦痛の中ですつかり腹づもりをきめてしまつた。みんなは自分が意識的に長田氏の中から身を以ておほうたと解釋してゐる。何もすべり落ちた膝かけを持ち出して、そのロマンチックな物語りを味のないものにするにも及ぶまゝ。

新聞記者たちは、このドラマチカルな英雄的行爲を一般に告げ知らせるために、めい／＼先を争つて電話口へ飛びつくのであつた。

傷口の手當ても、兎に角すんだ。

篤夫を直にもよりの病院に送らうといふことになつた時、長田氏はかたはらからいふのであつた。「いや、わしの屋敷へ連れて行つて下さい。わしは細田君が全癒するまで、手元で療養させる義務があると思ふのです。」

篤夫が身を横へた自動車には醫者が介添ひ、次ぎの自動車には、晚餐會の遅參をいひわけした長田氏が部下の一人と乗り込んだ。二臺の自動車は、オートバイの警官に守られて長田氏の本邸へ向つた。飛報はもう屋敷に着いてゐた。星子の棲居になつてゐる方の洋館の一室が負傷者のために病室になつてゐた。すべての用意はととのへられ、現場にゐあはせなかつた一族郎黨は玄關に群がつてゐた。

彼等の中心に、星子が青ざめた顔で立つてゐた。彼女は自動車がつくとスリッパのまゝ走り出した。

長田氏は娘の方へ柔しい笑みを投げた。

「星子、わしはお前にも禮をいふべきかも知れん。細田君はお前の推薦だから——」

「そんなことよりも——」

と、彼女は心痛に充ちて、篤夫の自動車の方へ目をやつて訊ねた。

「大丈夫。肩の骨折だけださうだ。」

篤夫は人々の手で扶け下された。星子は人目をはゞからず、肩にうづたかく繻帶を巻いた上へ、ふ

うわりと外套をかけてゐる篤夫の顔に覗き込んだ。

「有難うよ、篤夫さん。」

彼女の目には涙がすぐにあふれて來た。

篤夫はひとの腕にもたれて歩みながら、たゞ微笑を見せて、うなづくやうにした。

ベットに寝かされて、呼びよせられた外科の大家によつてあらためて傷口が検査され、丁寧に手當が施された。山口博士も、決して心配になる傷ではないと保證した。しかし大凡一週間の療養を要するであらうと宣告した。

いつも持病のために垂れ込めがちな人に殆ど顔を見せたことのない長田夫人さへ、わざ／＼篤夫の枕邊に禮をいひに來た。今まで、新米のくせにといふやうな目で見てゐた郎黨たちも、急に無限の敬意と親みとを持ちはじめたに相違なかつた。彼等をははるがはる病室へ來て、新しい英雄の寝すがたを眺めようとするものゝやうに、ソツと爪立つてのぞいては立ち去るのであつた。

長田氏は晚餐會にのぞむために去つた。

——みんなが負傷者の安靜のために遠ざかつたあとで、星子は健全な方の篤夫の手を握り締めて、そして熱い感謝を罩めて再び禮をいふのであつた。

「有難うよ、ほんたうに有難うよ。あなたがゐなかつたら、父はどんなことになつたか知れませんか。」

いのちの恩人ですわ。父だつて、一生忘れやしないでせう。」

「いゝえ、何でもありません。僕があなたのお父さまのために、いのちを捨てたつて何でもありません。」

と、篤夫はちつと星子の目をみつめていつた。

——先生のためには、彼はいはなかつた。意識して、あなたのお父さまのためにといつたのだつた。敏銳な青年は、どんな片言隻句といへども、それを無駄に使用すまいと力めるのである。

「有難うよ。私だつて忘れやしないわ。」

——その夜から、篤夫は長田家の最上の賓客だつた。

翌日の新聞紙は異常な出来事と、稀有なる一秘書の忠勤行爲とのために、その社會面をほとんど費しつくした。

——その記事をよんで、少くとも三人の女性はひどく驚愕したであらう。はつ子と照子夫人とはすぐにかけてつけたが、いづれも嚴重な面會謝絶のために本意なく歸つて行つた。ふち子は電話もかけては來なかつた——さればとて、彼女の驚愕が最も小さかつたともいはれまいと思はれた。

雪解の街路が乾くのと同じ程度で、篤夫の負傷は逸早く癒つて行つた。三日目あたりからはもう起きてても大事なく思はれたが、醫者よりも星子がそれを許さなかつた。

春

いつの間にか、厳しくひどい冬が過ぎて、世の中はすっかり春になつてしまつた。

淺藍色に夜空がかすんで、星のきらめきがなつかしさと哀しさとの微妙な唄を人のこゝろにうたつて聞かせるやうな晩、かなり更けて銀座裏の支那料理を出た男女づれがあつた。

それははつ子と篤夫だつた。はつ子は冬分よりもつと派手に作つてゐるが何となく顔にもすがたにもやつれが見えた。それに反し篤夫はめつきり生々しかつた。縁つぼい意氣な背廣に、同じいろのソフトを冠つて、プラチナ飾りの藤の杖を氣輕に振まはしてゐた。

「だつて、君のいふことはみんな無理だよ。その時その時で、人間は自分を生かしていかなければならんもの——といつたつて、僕は何も君がいつぞや近藤君を捨てたやうに、君を捨ようなぞとは思つてもゐないのだ——君が、我慢してゐてくれさへすれば、いつまでだつて今日の狀態を保つて行くことは出来るのだもの——」

はつ子はしよんぼりと肩をせばめるやうにして歩きながら、吐息をついた。

「それはさうよ。あたしだつて覺悟はしてゐたのよ。でも、今になつて見ると、何だか死にたいやうな氣持になるわ。」

「どんなことだつて馴れ、ば何でもないさ。」

と、篤夫は大人びた調子でいつて、

「兎に角、僕とこのままに行くには、僕にある自由をあたへてくれなければ駄目なのだ——君だつて、僕の大きな發展をよろこんでくれなければ——」

はつ子は提げぶくろを胸に抱くやうにして、星がうるみながら瞬いてゐる夜ぞらを仰いだ。

「あたし、あの時の口惜しさが忘れられないわ。時々思ひ出すと、あのひとを殺してしまひたくなるわ。」

「いつの口惜しさを？ だれを？」

と、篤夫は微笑しながら高い香りの煙を吐いた。

「負傷をなすつた時、折角見舞ひに行つて上げたのに——どなたでもお目にかゝらせるわけにはまゐりませんと、さうおことはりして頂戴——だつて。あのお嬢さんが——」

「それは仕方ないさ、君と僕とのことは誰も知らないのだもの——」

二人はもう少しで、まだなか／＼にぎやかな大通りへ出ようとしてゐた。

「ぢやあ、承知してくれませぬ？」

と、篤夫がいつた。

はつ子は、ツと寄り添つて、男の手を掴みしめて、ちつと顔をのぞき上げるやうにした。

「仕方がないわ。でも、これまで通り逢つてくれなきやいやよ。」

「え、それはもう——時に、通りへ出たら、タクシーを呼びとめるから大人しく一人で乗つてお歸り。ね。」

二人は大通りへ出た。そして四つ辻のポストの側にたゝすんで空自動車を待った。

街路樹の芽はもうたつぷりふくらんで、かすかな緑の匂ひがしんみりした夜氣の中にたゞよつてゐるやうに思はれた。はつ子は深い息をした。

タクシーをさがして、遠くへ目をやつてゐた篤夫は、ふと、歩道の行人の中に、知り人を見出した風で、ソフトのつばをすこし下げるやうにした。

「君、僕はあるき出すよ。あすこへ山名が来る——あいつは目が早いんだ。二人ゐるところを見つけては悪い。」

さういふと、はつ子の別れの言葉を受けようともせず、多分、もう發見されてしまつたと覺悟した

のであらう。篤夫はわざ／＼山名が歩いて来る方へ進んで行つた。

しかし、懸念は無用であつた。先輩は顔を突き合せさうになるまで気がつかなくつた。それほど彼は酔つてゐた。

「おや、幸運兒！」

と、彼は叫んで、悪丁寧に、帽子を取つて腰をかゞめた。

「わが幸運兒閣下、なんだつてこんな時刻に、たつた一人で歩いておいでなさるのだね？ 君にも似合はん。」

「御きげんですね？」

と、篤夫はいつもの愛想のいゝ微笑を見せた。

「御きげん——は、いや——」

と、山名は辛い聲で笑つた。

「今日は奴隷解放の祝ひを一人でやつたところなんだ。」

篤夫はいぶかしげに眺めた。

「何て眼付をするんだね？」

と、山名は嘲けるやうに、

「新興も、長田さんの獨占になつて見れば、もう僕なんか要はないんだ。いや、何も君の前で未來の御舅御の悪口をいふんではないのだよ。僕あ、機關雜誌には不向きな男だからなあ——」

「ぢやあ、社をおやめになつたので？」

「さうさ、やめたのだからやめさせられたのだから——は、は。」

そして、あたりを見まはすやうにして、

「おお、こゝのカフェの紅茶はうまいぜ。僕あ、どが乾いて仕方がないんだ、つき合ひ給へ。」

腕を把られて、篤夫も仕方なくつい側のコーヒ店にはいつて行つた。

山名はトロンとした目で篤夫をみつめたが、ふと、思ひ出したやうに笑つた。

「は、は、は、君にいい綽名をしへてやらうか？」

篤夫は紅茶を掻きまはしてゐたさじを休めて見返した。

「綽名？」

「うん。社では君のことを椿事成金といつてゐるのだぜ。ソラ、古川さんにあんなに信用を博したのが、劇場の火事でお嬢さんを助けたゝめだらう？ 今度は少し痛事だつたが例のピストルさはぎだ。しかし痛事でも、すばらしい弾丸だつたな。當り屋とは君のことよ。」

篤夫はさすがに一種の羞恥を感じて目を伏せた。

山名は上機嫌だつた。

「君の出世ぶりは全く奇蹟だよ。傳説時代の英雄みたいに目ざましい——僕はいつか君に才能の危険を説いたつげなあ——君はあの時僕を嘲つてゐたやうだつたが、成程、君のやうな幸運兒は、僕どもの言葉を嘲ける権利を持つかも知れん。總じて現代といふものは——」

篤夫は成功ぶりをいはれた時羞恥を感じたが、相手が例の筆法で、説法めいたことをいひはじめる、忽ち氣弱さを乗越した。

「何をいつてゐるのだ、尻も温まらない素浪人メ！」

彼は星子から貰つたプラチナの腕時計を眺めた。すると彼女の許へ急に歸りたくなつて、こんな飲んだくれとつき合つてゐるのが馬鹿らしくなつた。

彼はテーブルを叫いて女給を呼んだ。

「自動車を」

そして、山名にいつた。

「もう大分遅いですね。ステーションまでお送りしませう。」

——彼はふと、去年の夏の銀座で故人の木村に邂逅して、勵まされ、小遣を貰ひ、職業の口を世話をししようとまでいはれて、目がしらが熱くなつた晩のことを思ひ出した。一切がなんとあわたし

く、輝かしく推變したことだらう！

——彼は照子の許をも時々はたづねてやらねばなるまいと思つた。

そして山名をやつとテーブルからひき放して、押し込むやうに自動車に乗せたのだつた。

——山名をステーションで下すと、篤夫は長田邸へと自動車をいそがせながら、香りの強い紙巻をふかしたつづけてゐた。彼の心にはもう今別れた山名のすがたなどは映つてはゐなかつた。春夜の淡青い霧が低く煙つてゐる巷の灯のいろは、何となく夢ましく甘たるかつた。その甘たるい惱ましげな情緒は、やがて青年の胸に一種肉慾的な望みをさへ起させるのだつた。彼はついこのごろはじめて觸れた星子の肩の感覺を思ひ出した。だが、やがて紙巻の喫ひ差しを投げ捨てて、さも嘲けるやうに自分にはやいた。

——どんな甘いものも、これまでのやうに今後僕を泥酔させることは出来ないんだ。一流の酒客はいつも次の新しい盃のために準備を怠つてはいけない——

篤夫は自分の現世欲望が、どこまで行つたら満足するのか、その限界を豫告してゐないのが得意だつた。彼はわれとわが欲望をいやが上に擴げようとするやうに、胸を張つて深い息を何度もした。

自動車はもう屋敷町にはいらうとして、緩やかな薄暗い坂を上りはじめてゐた。



定價貳圓參拾錢
郵送料拾貳錢

地 上 樂 園

昭和二年一月十一日印刷
昭和二年一月十五日發行

著 者 三 上 於 菟 吉
發 行 者 佐 藤 義 亮

發 行 所 新 潮 社

東京市牛込區矢來町三番地

電話牛込 長
八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番
振替東京 一七四二番

東京小石川區江西戶川町 富士印刷株式會社印刷

「地上樂園」終

著氏吉菟於上三

長篇小説 日輪

前編十二版 四六判特製 一冊三百卅頁 各壹圓九拾錢 郵送料各拾錢
後編十一版

『日輪』の女主人公は、彼女の戀と生活とを夢んで嚴しい家庭牢獄を破り、一絲まとはざる裸身で人生の荒波に飛び込んだ。彼女の周圍に渦巻く、醜く、淺間しく、肉体的、鐵面疲な獸慾の大渦紋は、遂に彼女の雪白な肌と魂とを穢し得たか？ 汚中の汚、濁中の濁から、人間を救ひ出すのはいつも、愛の力だ。相慕ひ寄る肉と魂との勵ましたか？ 『東京日日』『大阪毎日』『二新聞』に連載されて未曾有の歡迎を得た此の人間記録こそ、現代の戀愛經であり、又新らしき女性觀と云ふべきものであらう。悲慘と豪華、愁苦と悅樂との奇怪なる交錯の中に、大いなる刺戟を青年子女に與ふることを疑はない。

長篇小説 白鬼

第十版 新四六判特製 五百二十頁 價貳圓貳拾錢 郵送料拾錢

最も現世的な、肉體的な、最も神を怖れざる者の人間記録がこれだ。無比の美貌と絶倫の才氣とを兼ね備へた一個の青年が、その才と色とを以て、どれだけ肆まに彼自身を生かし抜いたか——多くの婦女子は、彼の美しくさの前に悉く恥ぢを忘れて跪拜した。あらゆる社交界は彼の才氣の前に悉く歡迎の門を開いた。此主人公の稀有な性格を描いて氣の弱く讀者に面を背けさせる程官能的芳烈さを極めた本篇が、曾て時事新報に連載せらるゝや、滿都の子女は異常な昂奮に悶えてシロオニズムの流行語をさへ生じ、その父兄のある者は、好色亂倫の書として激烈な批難を捲き起したほどである。

世評高き長篇小説

中村武羅夫氏著 瑠璃鳥

四六判特製・價貳圓五拾錢 五百七十頁・郵送料拾貳錢

著者曰く、「私は處女作『人生』發表以來、長篇小説ばかり二十篇近く書いたが、始めて會心の出來榮と言つてもよいのは此『瑠璃鳥』である。構想の自然と人物描寫の鮮かさ、その運命の開展の必然さとは、從來の筋の爲めに筋を追ふヤマ澤山の小説と違つて、確に一新境地を開拓したものだと思ふ……」と。本書の眞價値を知るべきである。

谷崎精二氏著 火を戀ふ

四六判特製・價壹圓四拾錢 二百六十頁・郵送料拾錢

敢へて問ふ 曾て此書ほど痛切なる戀愛記録ありしや？ 見よ、一人の誠實眞摯なる男性が、美しい、併し心に病をもてる一人の女性を愛して如何に異常なる戀愛生活に苦しんだか。實に滿卷悉く炎の文字、爛班たる鮮血の文字で、謂ゆる「血を濺ぐ！」と云ふ形容詞通りの意義は『火を戀ふ』と題する此篇に於て始めて讀まるゝであらう。

加藤武雄氏著 夜曲

四六判紙裝・定價貳圓 四百八十頁・郵送料拾錢

七三・耳隱しの時代に、ともすれば丸鬚の重みにうなだれる、古き日本のまゝの女の姿を描いた作だ。數奇なる運命に純眞の魂を弄ばれて、戀に敗れ、信仰に敗れ、子の愛に敗れ、終に悲劇の中に死んだ女の物語。新時代の女性の物狂はしいジャズバンドの燦音の隙に、幽かに聞える嗚咽の聲は、讀者をして暗愁堪へ難からしむるであらう。

細田源吉氏著 大都

四六判特製・定價貳圓 三百九十頁・郵送料拾錢

大正八九年度に於ける株式市場の大混亂を背景に、營利に狂奔する市人の生活の種々相を描く。取材と着眼とに於て先づ小説壇に一新境を開けるもの、一攫萬金の大商人を描き、その重壓の下に痺より果敢なき雇人の生活を描き、その裡に亦た愛慾の惱みをあざなひ來つて、現代社會構成の動脈と云ふべき都市生活の一大斷面を示す。

◇ 世評高き長篇小説 ◇

江馬 修氏 著

追放

四六判紙装・價貳圓五拾錢
六百五十頁・郵送料拾貳錢

作者が大いなる自負をもつて世に問へる一千枚の大作である。在來の舊き一切を抛ち、敢然インタナショナルリストとして立てる作者が、舊き時代の底より更生せんとしつゝある新時代の苦惱と闘争を生々と如實に描けるもの。これこそ現代の悩みであり、世界の顔である。作者にとつて正に劃時代的のものであることは云ふまでもない。

森田 草平氏 著

輪廻

四六判紙装・價貳圓八拾錢
六百二十頁・郵送料拾貳錢

著者が捲土重來の意氣を以つて書ける一千枚の大作である。世界の文學に類例を絶せる特異の題材を取扱つた、奇峭にして凄慘、激越にして深刻大膽を極めた戀愛小説であつて、これと共に、戦慄すべき遺傳の肉體に絶望せる一青年が、傳統的な謬れる因襲と思想とに向つて敢然として闘ふ悲壯の戦を描いた、切實な社會小説である。

池谷 信三郎氏 著

望郷

四六判特裝・貳圓五拾錢
五百五十頁・郵送料拾貳錢

菊池、久米、里見の三氏の選によつて、時事新報の懸賞小説の第一等を贏ち得て、文名忽ち天下に喧傳さるゝに至つたものである。異境伯林を背景として多感多情な一青年に配するに、清純にして明るき挿話を以てし、作者が青春の力を傾倒せる苦心の作で、その奔放なる構想、その陰影豊かなる描寫は、新興文壇に異彩を放つてゐる。

佐佐木 千之氏 著

苦惱の街

四六判紙装・價貳圓八拾錢
三百八十頁・郵送料拾錢

人生の曙に立つ若き人々の苦しくも傷ましき足跡を、作者はこゝに敬虔な氣持で展開せんとした。美しき下女の性的生活、魔如き女優の誘惑、不良少年の淫蕩なる生活、秘めたる戀に悩む美しき少女、その他あらゆる近代都市生活の持つ苦艱を超えて、如何にして吾等は生き、如何にして自己の道を踏むべきかを描いて深刻を極めた。



